

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2007年9月

## 博士論文審査報告書

論文題目：「因果関係を表す接続表現の日中対照研究」

申請者氏名：新田 小雨子

主査 鈴木 義昭 (大学院日本語教育研究科教授)

副査 佐久間まゆみ (大学院日本語教育研究科教授)

副査 川上 郁雄 (大学院日本語教育研究科教授)

新田小雨子提出の博士論文、「因果関係を表す接続表現の日中対照研究」の公開審査について報告する。

本論文は、「因果関係を表す複文」の諸特徴を日本語と中国語の対照研究の立場から分析を行った論文である。論者は、日本語の因果関係を表す複文においては、接続表現が必須であるのに対して、中国語のそれでは、必須の場合とそうでない場合とがあることに着目し、且つその異同の分析を行おうとする点を出発点としている。特に、後者の分析時に用いる接続表現（「關聯詞語」）は、中国語独特のもので、接続詞と副詞とが結合され、因果関係等の細かいニュアンスを付与する機能を持ったものである。本論文において、論者は、参考資料にまとめられている膨大な用例を収集し、これに基いて実証を展開する。その言わんとするところは、因果関係を表す接続表現をテーマとして、日本語・中国語に見られる「機能性」と「使用範囲」との異同を明らかにするとともに、その成果を中国語母語話者の日本語習得に役立てんとするところにあるのである。

本論文においては、より慎重な考察を重ねた結果、以下の8点が明らかにされた。

- 1) 中国語の因果関係を表す複文が「説明因果複文」と「推論因果複文」とに二分されること。
- 2) 前、後節の因果関係の度合いの強弱を判断する時、日本語と中国語とでは、「關聯詞語」（接続マーカー）の数によって差異が生ずること。
- 3) 日本語の「接続マーカー」の使用範囲は、中国語の「關聯詞語」に比べて、より広いこと。
- 4) 中国語における焦点の表現形式は、日本語のそれよりバラエティーに富み、使用が自由であること。
- 5) 前、後節が同主語の場合、日本語の方が中国語より制約が受けにくく、異主語の場合には、中国語の方が制約を受けにくいこと。
- 6) 因果関係を表す「所以」、「因此」、「因為」等は、いずれの場合でも使用可能であるが、「于是」だけは、主語のアスペクトの制約を受けること。
- 7) 中国語の構文モデルを「順行型」、「逆行型」、「変形型」に三分する時、前二者には共通点もあるが、「変形型」のみは、両者と共通点がないこと。
- 8) 中国語母語話者が日本語を学習する時の問題点を四点挙げ、両国語の面から日本語教

育に提案を行なったこと。

なお、本論文には以下のような諸点が課題として残されている。

- 1) 説得を重視する説明文や論説文等の論理的な文章や各種の談話資料における因果関係を表す接続表現の日中対照分析
- 2) 因果関係を表す複文と連文における接続表現（「接続詞」・「接続助詞」）に関する日中対照分析
- 3) 因果関係以外の複文を含む接続表現の文脈展開に関する文章・談話レベルでの日中対照分析
- 4) 対照研究の方法論の意義と課題を踏まえ、言語観のみならず、言語能力観とどのように相対していくか。

今後もさらに研鑽に研鑽を重ね、考察を深めて、1)～4)についても思いを致すことによって、より高次の研究が継続され、結実されることを切望して止まない。

以上、副査兩名（佐久間まゆみ教授、川上郁雄教授）とともに審査を行い、新田小雨子論文「因果関係を表す接続表現の日中対照研究」が日本語教育における重要課題である、「因果関係を表す複文」に関して、日中対照研究の立場から、膨大な量の資料を駆使し、詳細な分析を行うとともに、日本語教育への提言も行っている点を十分に評価する。

さらには、日本語学及び中国語学単独であっても、それぞれ高水準に在る点を十二分に了解するものである。よって、本論文が、早稲田大学大学院日本語教育研究科博士学位取得規則に合致した論文として認め、ここに報告する。